



Title	Gallia 58号 卒業論文要旨
Author(s)	
Citation	Gallia. 2019, 58, p. 115-117
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/72873">https://hdl.handle.net/11094/72873</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 卒業論文要旨

### 『雄鶲とアルルカン』におけるジャン・コクトーの美学—公衆と音楽—

上 妻 志 的

1919年に発表されたコクトーの『雄鶲とアルルカン』は、音楽家サティを称揚した音楽・美学評論として知られている。本文はアフォリスム形式で、大文字のみの断章を含むなど文体に特徴がみられる。本稿は本作品にコクトーが込めたその表現形式から読み取れる思想について明らかにした。

第一章では、まず本作品の成立に不可欠な要素であるバレエ『パラード』の評価について『雄鶲とアルルカン』の補遺を分析し、その共同制作のメンバーのキュビズム性に影響を受けたことを読み取ることができた。またアポリネールによる序文と当時の前衛運動の思想の考察から、その共同制作が『パラード』に客観性を与えたことがわかった。そういう客観性は『雄鶲とアルルカン』ではアフォリスムによるテクスト構成、巧みなアナロジーによる客観的な図式化などにみられることを明らかにした。

第二章では、『雄鶲とアルルカン』における批判対象である公衆について分析し、コクトーの主張に迫った。公衆に関する断章群からはその無理解が浮き彫りになった。公衆は時代遅れであり、権威主義的で真に価値あるものへの理解がないというのだ。その原因は公衆が表面的にしか物事を理解しないこと、時代につ

いていくことに対して怠惰であることだった。一方でコクトーは「客観的分析による真実の再発見」のための方法である「簡潔」を提唱した。

以上から本稿では、終生自身を詩人として定義したコクトーが、『雄鶲とアルルカン』で客観的な分析・表現を実践し、同時に公衆に対する啓蒙も試みたと結論付けた。

ただ、いかに客觀性を込めてもコクトー個人の主觀的な意見の表明であることに変わりはなく、矛盾があるようにも思われる。しかしここでコクトーは自らの矛盾を露呈することにより、世界の捉え方には客觀性と主觀性が同時に内包されているという状態を弁証法的に提案し既存の価値観の相対化を目指したとは言えないだろうか。

### 『赤と黒』の女性たち —レナール夫人とマチルド—

馮 雪 穎

スタンダールの女性登場人物たちの描き方について、先行研究では意見が分かれている。19世紀前半の同時代の小説において、女性は、一般的に男性の作者からの一方的な視線をもって描かれていたとされているが、スタンダールが同時代の作家と同様に、一方的に女性を描いていたと解釈する研究者がいる一方、彼がフェミニストであったと主張する者もいる。そこで、『赤と黒』において、対

照的に描かれているレナール夫人とマチルドという二人の女性を考察することで、作中から読み取ることのできる彼の女性観について考察した。

第1章においては、レナール夫人とマチルド、各自に特に繰り返し記述され、際立っている特質について考察した。

第2章においては、幾つかの先行研究において、レナール夫人とマチルドのコントラストの曖昧性が指摘されていたことを踏まえ、二人の女性の類似点について考察した。その結果、指摘されていったような二人の間の「特質の交換」は見られないものの、二人には、他の女性登場人物と比べた際に際立つ美貌の描写や高貴さに加え、時代のジェンダー規範をそれぞれ内在化しているという共通点を見出した。また、先行研究において指摘されている「特質の交換」は、レナール夫人において矛盾として見られるが、それは彼女だけの矛盾ではなく同時代の「家庭の中の天使像」を体現した矛盾なのでないかと結論づけた。

第3章では、ジュリヤンに対する二人の女性という視点より考察し、二人の女性が、ジュリヤンと他の男性ライバル間の媒介としての役割を果たしていると考察した。「男のような」マチルド、彼女とジュリヤンとの共通点という視点から、マチルドが公的な領域に入っているのではという問題が残っていたが、マチルドは、結局は私的な領域に閉じ込められていたと結論づけた。

以上より、スタンダールは、同時代の男性の作者とほぼ似た視点を持って女性を描いていたのではないかと結論づけた。

モーパッサン『ベラミ』における「怒り」

平 島 沙紀子

『ベラミ』は今日とりわけ短編小説の名手として名高いモーパッサンの長編第二作である。本論文では、『ベラミ』において数多く描かれる登場人物たちの「怒り」という感情がどのような役割を果たしているのかについて考察した。

第一章では、作家がどのように「怒り」を描いているのか、「怒り」の表現について分析した。「怒り」を直接意味する語彙として9つの語彙が「怒り」の描写に用いられているほかに、身体の一部または全体の動きや様子を描く身体表現と、「怒り」の矛先に対する暴力欲求という2つの「怒り」の表現方法が用いられていることを確認した。

第二章では、登場人物たちがなぜ怒っているのか、「怒り」の原因について、主人公デュロワと彼を取り巻く4人の女性たちに対象を限定し、考察した。それにより、彼らの「怒り」の原因是、「金銭」「恋愛」「自尊心」の3つに大別することが出来ると分かった。これにより『ベラミ』における「怒り」は卑近であることを示した。

第三章では、デュロワが「怒り」によってどのような行動を起こすか、「怒り」と行動について考察した。まず、小説の第I部と第II部では「怒り」と行動のあり方が異なることを示した。第I部では一つの「怒り」とそれによる行動は個別に完結しているが、第II部では複数の「怒り」とそれによる行動がそれぞれ絡み合い、物語の展開装置となっている

ことが分かった。次に、暴力という「怒り」による行動の分析で、暴力が欲求にとどまらず実現するには、「怒り」の理由に正当性があり暴力が社会的に問題ないと見なされる状況にあるという二つの条件に依っていることが分かった。

本論文では、『ベラミ』における「怒り」は、登場人物の卑俗さを際立たせ、主人公の出世の原動力の一つという形で物語を推し進めるという役割を果たすと結論付けた。